

太平洋諸島の言語と社会

岡村 徹

はじめに

言語学の分野では、オセアニア地域の諸言語をわかりやすく解説した本がほとんどない。このような状況では、一般の人にオセアニア地域に目を向けてもらえるはずがない。ここではその点に留意しながら、試験的な教材として、できるだけわかりやすく、かつ興味を持ってもらえるよう配慮した。とは言え、オセアニア地域には、世界の言語の4分の1が存在していると言われる。1人の教師ができることには限界がある。しかしながらこのノートを通して読者に2つのことは理解していただけるかと思う。1つはオセアニア地域における言語の多様性であり、もう1つはその多様性こそがオセアニアの人々の生活を可能にしているということである。このような事柄を通して、一人でも多くの人々がオセアニアの言語に、そしてオセアニアの人々に興味を持ってもらえれば幸いである。

1 島嶼の言語的世界

1.1 オーストロネシア諸語

「オーストロ」というのは「南」、「ネシア」というのは「島」を意味する。したがって南島語族ともいう。語族というのは、言語の系統に関するもので、平たく言えば、ことばの家族のようなものである。おおざっぱに言って、オーストロネシア語族というのは、西はマダガスカルから東はイースター島まで、北はハワイ諸島から、南はニュージーランドに至る広大な領域にまたがっている。ここで私たちが理解しないといけないのは、このオーストロネシア諸語は過去において、共通の故里が存在したということである。その故里をめぐっては中国南部あたりを想定したものが一つの有力な説となっているが、現在のところ断定するまでには至っていない。また同じオーストロネシア諸語でもポリネシア地域は、一般に言語文化的に均質であるが、メラネシアやミクロネシア地域になると雑多な性格を有していることも頭に入れておきたい。こうした多様性が生まれる背景としては、長い年月が経過していること、何度にもわたって人の移動と接触があったことが考えられる。

次の表1はオーストロネシア語族の語彙を比較したものであるが、広範囲にわたって類似性が認められる(崎山 1993)。

表 1 オーストロネシア語族の語彙の比較

	「天」	「石」	「ヤムイモ」	「胸, 乳」
マダガスカル語	lanitra	vato	ovy	nono
マレー語	langit	batu	ubi	susu
タガログ語	langit	bato	ubi	suso
パラオ語	eanged	bad		tut
フィジー語	lagi	vatu	uvi	sucu-na
サモア語	lagi	fatu	ufi	susu

出所 崎山 (1993:68) をもとに作成

ことば以外でも共通項は多い。例えばタロイモ、ヤムイモ、ヤシ、パンノキ、バナナといった有用植物、犬、豚、鶏といった家畜、さらにカヌーを操ることができるといった点が挙げられる。神話も東南アジアとの対比において、学問的な関心が指摘されている。約六千年前に東南アジア本土を出発して、太平洋に進出したからなのであろう (高山ほか 1992:33)。

1.2 トライ語

トライ語研究の第一人者としては U. モーゼル (Mosel, Uriel) (1995, 1980, 1984) がいる。トライ語の話し手は約9万人である。方言は大きく三つに分かれる。それぞれココボ方言、北部沿岸方言、周辺部で話されている方言の三つである。母音音素は / i, e, a, o, u / の5 つで、子音は / vl, vd, p, b, , m, t, d, s, n, l, r, k, g, ng / の15個である。文法面では三つの特徴に触れておこう。まず述語辞の存在である。メラネシア語派には三人称をあらわす *i* という小辞が備わった言語が多い。パプアニューギニアの共通語トクピシンに、この要素が混入しているのは、メラネシア語の文法体系の中で重要であるからに他ならない。次はトライ語の例である。

(18) i lul upi ra nian (モーゼル 1995:29)
 3単 求める ART 食べ物
 「彼は食べ物を求めた」

(19) Mikael i tar vana Raluana (モーゼル 1995:16)
 マイケル PM TA 行く ラルアナ
 「マイケルはラルアナへ行ってしまった」

次に所有物の範疇化を取り上げる。これもメラネシア語派に特徴的な要素で、後天的に獲得されるものには *ka* という範疇詞をつける。一方、先天的に存在するものは所有代名詞の接尾辞をそれらの名称につけてあらかず。

(20) *kau=gu* *iang* (モーゼル 1995:35)
 私の 名前
 「私の名前」

(21) *a ul=* *u=gu* (モーゼル 1995:32)
 私の 頭
 「私の頭」

簡単に解説すると、「頭」というのは先天的なものであり、生まれたときから備わっているが、「名前」は後からつけられるものであると解釈される。他にも「家」、「バナナ」などが *ka* のつく名詞として該当する。それに対して、「お腹」や「手」といった身体部位には *ka* はつかない。もともと備わっているからである。

最後に修飾関係を取り上げたい。修飾・被修飾の関係はメラネシア語派では比較的、語順がゆるやかであることが指摘されている。トライ語も例外ではなく、次のように語順に流動性がある。

(22) *a* *ikilik na* *pal*
 ART 小さい C 家
 「その小さい家」

(23) *a* *pal* *ikilik*
 ART 家 小さい
 「その小さい家」

他にもタガログ語やパラウ語で観察できる。

社会言語学的に興味深い事柄を二、三取り上げてみよう。まずトライ族の英語に対する態度を述べる。英語は1960年以降、教育の言語として学校では使われてきた。そのため英語を駆使できるものは教養のある人として見られたり、近代的な生活に目を向けるようになった。した

がって、あまり英語のできない人であっても、トライ語と英語を混ぜて使用するようになった。ラジオなどメディアの世界でもごくふつうのこととして、英語がトライ語に混ぜて使われるようになった。ただ保守的な人びとの中には、若者のこうした言語使用に賛成できないものもいた。村の学校でもこうした傾向は続き、現在では日曜学校でトライ語の読み書きを学習する程になっている（モーゼル1995:4）。モーゼルが資料提供者から自然に録音した若者のことばを観察してみよう（1984:12）。

・・・ tuk i ga par a bar, close ra bar abara ra outside. lo, nam ra umana members abara, ba nam i ga close, a umana bul pack up, take off. '・・・ (until the bar outside was closed. Well, the members (of the club) there, when the bar closed, the lads packed up, took off.)

太字の部分が英語であるが、モーゼルによると正式なトライ語文法に違反する言い方が含まれているという。動詞 *close*, *pack up*, *take off* に述語辞がついていないので非文法的になるという。

トライ族はもともとニューギニアでは優秀な民族であった。そのためヨーロッパ人との交渉でもうまくやってのけた。もともとココナッツや野菜で得た収入も多く、ヨーロッパ人の経営する農園で働かなくてもよかった。翻訳家や船乗りや旅行の案内をする人、といった具合に給料のいい職種につけばよかった。ヨーロッパ人宣教師と最初に接触したのはトライ族であったため、早くからヨーロッパ的な教育を受ける機会があった。ニューギニアの他の部族よりも優位にたてたのである。識字率が低いニューギニアにあって、一番最初に母語による読み書きができたという。このような歴史的社会的な背景は、言語の使用にも大きな変化をもたらす。

1.3 パプア諸語

パプア・ニューギニアの沿岸部や北東の諸島を除けば、その大部分がパプア諸語に分類される。一般にパプア系の先住民は3万年の伝統を有していると言われる。万年という単位が経過しているため、言語の分化や部族間の接触が進み、比較言語学的な作業が非常に困難な状況にあり、未解決な部分も多い。世界言語文化図鑑によると、パプア諸語は次の六つのグループに分類される（コムリーほか 1999:105）。

トランス・ニューギニア大語族	507 言語
西パプア大語族	24 言語
東パプア大語族	27 言語
トトリチェッリ大語族	48 言語

セピック・ラム大語族	98 言語
少数派大語族と孤立語	37 言語

このうちエンガ語が157,000人という話者数を誇り、ニューギニアでも最も多い部類に入る。言語学的にはきわめて雑多であるが、一般にSOV語順をとり、名詞句に比べ、動詞句の構造が複雑であるという一般的な特徴がある。例えば約25,000人の人びとによって話されているパプア南西部のキワイ語では次のような動詞形態をあらわす(コムリーほか1999:106)。

asidim-ai	“ 1つの物体を1回被う ”
asidim-o	“ 1つの物体を被い続ける ”
i-asidim-ai	“ 1つ以上の物体を1回被う ”
i-asidim-uti	“ 1つ以上の物体を何回かに分けて被う ”

オーストロネシア語との対比でパプア諸語の特徴を観察してみよう(紙村 1989:28)。

表2 パプア諸語とオーストロネシア諸語

	パプア諸語	オーストロネシア語
音韻	声調がある。	声調がない。
語彙	きわめて変差に富む。	かなり共通
語順	S-O-V	S-V-O
冠詞	ない。	ある。
名詞の 数と格	数と格のマーカ―を 使用	英語のような前置詞 や自由語形を使うことが多い。
代名詞	共通の基本語形なし	共通の基本語形あり
動詞	信じられない程に複雑。主動詞コンプレックスの内に、相・叙法・時称を含みさらに主語、直接・間接目的語は動詞に抱合されることが多い。動詞は、1つの全文でもありうる。	単純な構造。

出所 紙村(1989:28)をもとに作成

この類型論的な観察を通して、やはりパプア語の動詞形態が言語学的に注意が必要であることがわかる。次の 1.4 では、エンガ語を対象をしぼって、この複雑な動詞形態に目を向けてみよう。

1.4 エンガ語

紙村(1993:44-51)によると、エンガ語の方言には、マイ・ヤングブ方言、サカ・ライアブ方言、カンデブ方言、サウ方言、マラムニ方言、キャカ方言、コボナ方言などがあるという。母音音素として、/a, i, u, e, o/の5つ、子音音素として/p, t, k, b, d, g, s, j, m, n, ny, l, ly, w, y/の15を挙げている。文法面では、エンガ語の時制の種類が興味深い。エンガ語の時制の種類は5つに分類され、それぞれ未来形、現在形、直接過去形(今日の出来事)、近過去形(昨日の出来事)、遠過去形(一昨日以前の出来事)があるという。過去時制が3種類ある理由について、紙村は次のように述べている。言語と文化との関連で興味深い。

おそらく、エンガ族にとっての重大関心事である互酬性交換のタイプ、すなわち、直接交換か、1両日中に返酬せねばならないか、もしくは、もっと後日に返酬してよい遅延交換か、といった人間関係の平和友好維持システムと関連しているのであろう。

(紙村 1993:50)

エンガ語の叙法について、概観してみよう。例文はすべて紙村(1989)からである。

完了法

- (24) Namba-me kalai pyo-o
 私 は 仕事 する [o マーカー]
 eta- te- ly
 遂げる [完了接辞] 現在 1 人称単数形
 「私は仕事を完全にやり遂げている」
- (25) Pii menda la-t-eo.
 話 一つ 語る [完了接辞] [1 人称単数過去形]
 「私は話をしおえた」

奉仕法

- (26) Namba-me baa-nya kalai
私 は 彼 の 仕事
pya-kamai- lyo.
する [奉仕接辞] [1 人称単数現在形]
「私は彼の仕事をしてあげている」

目的法

- (27) Yoole nya-la- nya kalai
賃金 得る [不定詞語尾] ために 仕事
pi-dyamo.
する [3 人称単数現在形]
「彼は賃金を得るために仕事をする」

- (28) Baa-me kalai mende pya-a
彼 は 仕事 一つ する [不定詞語尾]
nae- nya. yoole nyi-nggi
[否定助動詞] [譲歩接辞] 賃金 得る [習慣接辞]
「彼は仕事を一つもしていないけれども、賃金をもらっている」

願望法

- (29) Namba Wapenamanda pa-a- nya
私 ワペナマンダ町 行く [不定詞語尾] [願望接辞]
masi-lyo.
思う [1 人称単数現在形]
「私はワペナマンダ町へ行きたい」

社会言語学的に注目されるのは、地縁クランの存在である。単一の父系氏族の成員たちが組織する村落が政治的法的な事柄を決定する。紙村(1989:110)によると、このような地縁クランがサカ谷には二十三集団も存在しており、ふだんから覇権を確立するために、互いに競合しあっているという。そのため日常会話も婉曲的・象徴的話し方も歴史上の昔語りも神話・伝説の語りも祝詞・呪文も、クランごとに似てはいるが微妙に違うという。この地縁クランがかねらのアイデンティティや言語(方言)を規定する力をもつ。

1.5 島嶼の英語

太平洋諸島における英国の動きを、まず見ておきたい。英語との接触は16世紀にさかのぼる。F. ドレイク (Drake, Francis) と T. キャバンディッシュ (Cavendish, Thomas) による世界周航がそれである。17世紀から18世紀にかけて、W. ダンピア (Dampier, William) がオーストラリア西岸とニューギニア近海を、さらに1767年には S. ウォリス (Wallis, Samuel) がタヒチ島を発見する。タヒチ島のパンノキ採集が目的のパウンティ号の来訪もその21年後の1788年である。その後、F. クリスチャン (Christian, Fletcher) らパウンティ号の反乱者たちが、ピトケアン島に移住している。1797年にはロンドン伝道教会の宣教団ダフ号もタヒチ島を訪れている。

しかし何と言っても18世紀中最大の功績を残した人物は J. クック (Cook, James) ということになるだろう。合計3回の航海で、数々の功績を残した。第一回目 (1769 ~ 1774) では、ニュージーランドの調査、クック海峡の発見など、第二回目 (1773 ~ 1774) には、南方大陸が存在しないことを証明し、第三回目 (1776 ~ 1779) では北方航路の幻想を打破した (石川ほか1987)。この三回目の航海でクックがハワイで戦死するわけだが、1770年にオーストラリアがクックによって発見され、20年もたたないうちに英国人がシドニーに最初の流刑植民地をつくったことを考えると、改めてクックの功績が大きいことがわかる。むしろオーストラリアのアボリジニにとっては、英国的価値観を押し付けられる第一歩となったわけで、彼らの側からすると屈辱の歴史が始まったわけである。ニュージーランドのマオリ族の場合も事情は同じである。

19世紀に入ると英国はニュージーランドを、米国はハワイに足場を築き、太平洋の商業活動を支配するようになる。19世紀末には、照明用の油とコルセットの材料を求めて英米の捕鯨船が活躍する。さらに英国は、フィジー (1874年)、ニューヘブリデス諸島 (1887年、フランスとの合同海軍委員会統治下)、クック諸島 (1888年)、クリスマス島 (1888年)、ファンニング島 (1888年)、フェニックス諸島 (1889年)、ソロモン諸島 (1893年)、トンガ (1900年) などに触手を伸ばし、保護領下、植民地化、あるいは主権獲得を成し遂げた。一方米国もグアノ法 (1856年) による無人島の領有、サモア分割 (1899年ドイツと)、ハワイ (1894年)、グアム島、フィリピン (1898年) などで権利を拡大していった。この英米の動きがオセアニア世界に与えた影響は少なくない。

下記に示すのは、太平洋島嶼国とその人口統計を示したものであるが (太平洋諸島百科事典参照)、程度の差こそあれ、全ての地域で英語との接触があったと言える。仏語圏でさえ、過去から現在に至るまで英語とのかわりがあった。

ポリネシア

アメリカン・サモア	35500
イースター島	2100
ウオリス・フトウナ	13700
クック諸島	17600
トウバル	8600
トケラウ	1600
トンガ王国	94400
ニウエ	2900
西サモア	16000
ピトケアン諸島	100
フランス領ポリネシア	172800

ミクロネシア

北マリアナ諸島コモンウェルス	32127
キリバス共和国	64000
グアム	114700
ナウル共和国	8400
パラオ共和国	13800
マーシャル諸島共和国	43355
ミクロネシア連邦	100360

メラネシア

バヌアツ共和国	135600
ソロモン諸島	272500
ニューカレドニア	151300
パプア・ニューギニア	3320700
フィジー共和国	700500

合計	5466642
----	---------

しかし、それぞれの国における英語の役割は異なっている。その国における英語の歴史的・社会的成立の背景、言語的特徴、文化的・社会的機能、教育言語の問題など、一様ではない。

だが英語の使用状況という観点から、次のように大きく三つに分類することが可能である（岡村 1996:117）。

第一グループ	オーストラリア、ニュージーランドなど
第二グループ	パプア・ニューギニア、フィジー共和国など
第三グループ	仏領ポリネシア、ニューカレドニアなど

まず第一に、オーストラリアやニュージーランドのように英語が母国語として使用されている国々が挙げられる。第二に、パプア・ニューギニアやフィジー共和国のように、もともと別の言語がありながら英語が公用語となっているところが挙げられる。第三に、タヒチのように英語よりも仏語の方が普及しており、英語は一部の観光やビジネスの場面に限られてくるところが挙げられる。

1.6 フィジー英語

フィジー共和国で話されている英語に目を向けてみよう。歴史的にはスペインやポルトガルの航海者が発見したとされているこの島が、英国との接触を持つのは1774年のクックが来島したときであった。その後、米国やドイツの領土になる可能性を持つ時期があったが、結局1874年フィジーは正式に英国の植民地となった。そしてオーストラリアの開発したさとうきび農園のため、インドから大量の労働力を移入し、多くのインド人が住みつくことになった。フィジーは1970年に正式に独立するが、社会のあらゆるレベルでフィジー系とインド系の対立を生むことになった。例えば、南太平洋大学の学生は、フィジー系とインド系が半々で、どちらかが優位にならないような配慮が見られる。武力政変の歴史は長いが、20世紀末の武力政変はまだ記憶に新しい。21世紀は、もともと住んでいたフィジー人と後から来た商売に成功しているインド人との共生の場を真剣に考えるときであろう。

英語は今やフィジーの国語であり、政府、ビジネス、教育の言語となっている。また部族間の共通語ともなっている。フィジーの英語は、J. プラット（Platt, John）に報告されているようないわゆる新英語としての特徴が認められる（プラット 1991）。ニューイングランド大学の J. シーゲル（Siegel, Jeff）はフィジー英語の特徴を記述し、さらに性差にも着目した。

(30) コピュラの欠如

Fella very rude priest, eh?

3単 とても 失礼な 牧師 TAG

「彼はとても失礼な牧師ですね」

- (31) Some gang really studing.
 QF 人々 ほんとうに 勉強する
 「ほんとうに勉強している人もいる」
- (32) 三単現 sの欠如
 She always call me that
 3sg いつも 呼ぶ 1sg そのように
 「彼女はいつもぼくのことをそう呼ぶ」
- (33) 過去時制マーカ― *been(bin)*の使用
 He been swear.
 3sg PTM 誓う
 「彼は誓った」
- (34) *ask*としての *aks*
 I aks the fella how much for the fish
 1sg 尋ねる DET 男 いくら DET 魚
 「その魚がいくらするのかをその男に聞いた」
- (35) 未来時制マーカ― *gonna*
 You call me and I gonna peep inside the door.
 2sg 訪ねる 1sg C 1sg FTM 出てくる DET ドア
 「私を訪ねてください、そうすればドアから出て来ます」
- (36) 三人称単数の代名詞としての *fella* の使用
 Fella come, fella go inside.
 3sg 来る 3sg 中に入る
 「彼は来て、部屋の中に入っていった」
- (37) 一人称双数 (包括複数) としての *us two* の使用
 what schoolbus us two go by today?
 何 スクールバス 1pl 行く P 今日
 「今日はどのスクール・バスで行くか」

(38) 一人称複数としての *us gang* の使用

Us gang learning about the thing.

1pl 学ぶ P DET 3sg

「わたしたちは、そのことを勉強しているのよ」

表3 基底フィジー英語における特徴的な言語要素の出現率

言語要素	男子	(N) 女子	(N)
a. one (不定冠詞)	49.1	(30/61)	28.6 (2/7)
b. us two	100.0	(3/3) -	
c. us gang	18.6	(8/51)	26.3 (15/57)
d. fella	31.6	(30/95)	2.8 (3/107)
e. thing	10.0	(2/20)	37.7 (20/53)
f. コピュラの欠如	23.4	(34/145)	22.7 (16/75)
g. コピュラの欠如	18.6	(11/59)	36.2 (25/69)
h. 三単現-sの欠如	60.0	(12/20)	53.6 (15/28)
i. 無標の過去	49.0	(78/159)	41.1 (62/151)
j. been	8.8	(14/159)	0.0 (0/151)
k. gonna	51.6	(16/31)	24.4 (0/41)
l. aks('ask')	88.9	(8/9)	100.0 (6/6)

出所 シーゲル (1991:667)をもとに作成

従来の社会言語学の理論では、男子の方が女子よりも非標準的な要素を採用しやすいということであった。たしかに上記のうち、a, d, j, kなどは従来の理論の通りである。しかし、c, e, g, lのようにあてはまらないものもある。シーゲルは、この結果について何らかの説明を加えるためには、もっと言語資料が必要であると述べている。場面による違い、社会的な差異にもとづいた場合による違い、個人差などを考慮した上で考察する必要があることを述べている。

また通時的な考察をも試みてはいるが、言語要素の出現に関して、体系的性が認められない。例えば下記の表の4項目については、出現率が減少しているが他の項目については変化が認め

られない。この4項目だけで考えると、英語教育が普及した結果であるとも言える。しかしもしそうであるとしたら、他の項目についても一貫した言語資料が得られるはずである。したがって単に英語教育の普及ということだけでは説明できない。ただあまり通時的な変化が認められなかった *aks* (=ask)や *fella* をフィジー人のアイデンティティと関連づけて説明ができる可能性がある。つまり *aks* や *fella* を使用することによって、フィジー人としてのアイデンティティを確立することができるというものである。別の言い方をすれば、これらの言語要素を使うことによって、外部世界との区別を無意識のうちにはかっていると言える。

表4 フィジー英語に固有の表現の出現に関する通時的考察
1974年と1982年の比較

言語要素	1974	(N)	1982	(N)
e. thing ('thing')	42.2	(22/52)	37.7	(20/53)
f. コピュラの欠如	78.3	(36/46)	22.7	(16/75)
g. コピュラの欠如	52.4	(22/42)	36.2	(26/69)
i. 無標の過去	45.1	(74/164)	41.4	(62/151)

出所 シーゲル(1991:672)

1.7 島嶼のピジン・クレオール

島嶼世界でよく知られているピジン・クレオール語として、ニューギニアのトクピシンおよびヒリモツ語、ソロモン諸島のソロモン諸島ピジン、バヌアツ共和国のビズラマ語、ハワイ諸島のハワイクレオール、ピトケアン島のピトケアン語、ノーフォーク島のノーフォーク語、フィジー共和国のフィジアン・ピジンなどがある。

成立の背景は、さとうきび農園が直接、接触の舞台となっている場合が多い(トクピシン、ビズラマ、ソロモン諸島ピジン、ハワイ・クレオール、フィジアン・ピジンなど)。ピトケアン語は、18世紀に結果的にエリザベス女王の命令に背いたことになったバウンティ号の反逆者たちに由来する。ノーフォーク語は、ピトケアン語を話すピトケアン人がシドニーの東に浮かぶノーフォーク島に移住したことによって言語(方言)が発生した。ヒリ・モツ語は、パプア湾でモツ語話者とその交易相手の言語が混交した結果であると考えられている。

どの言語の解説書もそろってはいるが、国内ではなかなか手に入りにくい傾向にある。トクピシンに関する文献は一番多く、研究者の数も多い。それぞれの言語の研究者は数多くいるが

代表的な学者を紹介しておこう。

トクピシン

P. ミュールホイズラー (Mühlhüsler, Peter) R. ホール (Hall, Robert A) など。

ビズラマ語

T. クローリー (Crowley, Terry) D. トライオン (Tryon, Darrell T) など。

ソロモン諸島ピジン

L. サイモン (Simons, Linda) C. ジョーダン (Jourdan, Christine) など。

ピトケアン語

A.S.C. ロス (Ross, A.S.C.) A. カルガード (Kallgard, A) など。

ノーフォーク語

S. ハリソン (Harrisson, Shirley) D. レイコック (Laycock, Donald C) など。

フィジアンピジン

J. シーゲル (Siegel, Jeff) R. モアグ (Moag, R) など。

ナウル・ピジン

J. シーゲル、岡村 徹など。

ハワイ・クレオール

D. ビッカートン (Bickerton, Derek) J. ライネッケ (Rinecke, John) など。

ヒリ・モツ語

T. ダットン (Dutton, T) J. ボールヘイブ (Voorhoeve, Jan) など。

1.8 ソロモン諸島ピジン

ソロモン諸島は面積が2万8446平方キロメートル、人口は30万人である。首都はホニアラで通貨はソロモン諸島ドル。最大の島として、第二次世界大戦で多くの死傷者を出した日本人にとっては忘れることのできないガダルカナル島がある。ココヤシやタロイモの栽培も盛んで、カツオなど水産資源も豊富である。住民は94%がメラネシア系で、ポリネシア系は4%にすぎない。あとはキリバス人、中国人、ヨーロッパ人などとなっている。

ソロモン諸島は、過去に英国とドイツに保護領化されたことがあり、日本には1942年から1945年の間占領された経験を持つ。独立は1978年。経済的には、水産物、コブラ、木材、パームオイルなどが重要である。政体は立憲君主制を採用している。

言語状況はきわめて複雑で、メラネシア語派の下位分類として、ネハン語群、ブカ・北ブーゲンビル語群、南西ブーゲンビル語群、ショートランド語群、チョイスル語群、ニュージョージア語群、西イザベル語群、東イザベル語群、ンゲラ・ガダルカナル語群、マライタ・サンク

リストバル語群、ウトウブア語群がある(崎山 1996:39)。このような多言語状況の中で果たす共通語の役割は大きい。ソロモン諸島ピジン語は部族間の共通語として、またアイデンティティを示す道具として重要である。そういう意味では英語よりも重要である。理論的にはポスト・クレオール連続体というものがあると考えられる。つまり現地語が多く混入したピジン語(基底語)から、英語の要素が多く含まれるピジン語(上層語)に至るまでさまざまな変異形が存在すると考えられる。このことはどの地においても同じことが言える。ソロモン諸島ピジン語は日常のあらゆるレベルで使用されており、都心部では脱クレオール化、つまりこの場合、英語に近づいていく現象が起きている。

社会言語学的に興味深いものとしては、C. ジョーダン(1991)の研究がある。ソロモン諸島ピジン語の未来時制マーカー *bambae* は他にも、*babae* と *bae* という変異形が認められるが、*bambae* と *babae* は年代層の高い人々に、*bae* は若い世代によって用いられる傾向にあるという。いくつか文例を示す。

(39) Bae mitufala ranawe tude naia.
FTM 1pl 逃げる 今日
「今日わたしたちは逃げる」

(40) Pipol no save wokabaot olsem bifo,
人々 NEG ASP 歩き回る のように 以前
「人々は昔のように歩き慣れてはいない」

(41) babae hem sensem ol laef blon solomon.
FTM 3sg 変える あらゆる 生活 LOC ソロモン
「それはソロモンのあらゆる生活に影響を与えるでしょう」

表5 BaeとBabaeの年齢による出現数の違い

25才から35才までの話者			36才以上の話者				
年齢	Bae	Babae	年齢	Bae	Babae		
J.M.	34	3	4	B.M.	38	1	17
M.F.	25	14	0	L.S.	54	2	16
E.R.	33	17	0	S.S.	65	1	7
E.N.	32	6	0	M.K.	51	3	9
B.M.	30	15	5	M.A.	39	2	3
E.M.	29	17	7	M.B.	36	2	3
合計	72	16	合計	11	55		

出所 サイモンズ(1985:77)をもとに作成

S. ロメイン (Romaine, Suzanne) (1991:631)によると、このような傾向は同じメラネシア地域でもニューギニアのトクピシンでは観察できないという。同じメラネシア人でも差異を強調してアイデンティティを保っている一例であろう。もちろんソロモン諸島ピジンの成立の背景がトクピシンと必ずしも同じであると言い切れないので慎重にならざるをえないが。つまりソロモン諸島の言語をもとに発達したとする説とトクピシンが伝播したとする説があるからである。もし前者が正しいとすれば、ピジン語の違いをアイデンティティという概念だけで説明するのは困難になる。最近、筆者がニューイングランド大学のJ. シーゲルから仕入れた情報によると、さまざまな言語レベルで、トクピシンとの分化が進んでいるという。やはりこれもメラネシア人の伝統であるということになる。いずれにしても成立してから一世紀がそこらで、これらの言語も何らかの社会的要因によって、多様性に富んできていることは事実である。

太平洋の多くの島々で、ソロモン諸島民が活躍していることも知っておきたい。ナウル島では毎年、技術指導で来島しているものや、中華街で店員として働くものがある。クイーンズランドのマッカイでは、いわゆるソロモン系のカナカと呼ばれる人たちがいる。かれらは祖先がさとうきび農園の契約労働者として、昔その地にやってきた人々の子孫である。パプア・ニューギニア大学で学ぶソロモン人も少なくはない。ノーフォーク島には、かつて存在したメラネシアン・ミッションの関係で生活をするソロモン人がいる。

1.9 島嶼の日本語

現在の島嶼世界で、日本語が聞かれるのは過去において日本人が何らかの目的で島嶼の人々と接触をもったからに他ならない。歴史的にはその接触の形態は大きく二つに分かれる。一つは戦争を通じての接触で、ニューギニアやソロモン諸島やミクロネシアなどが入る。もう一つは、契約労働者として日本人と島嶼の人々が接触した場合がある。ハワイ諸島やフィジー共和国では、さとうきび農園の契約労働者として、ニューカレドニアやマカテア島ではリン鉱石の採掘労働者として、島民と接触をしている。ここではナウル島の例を取り上げてみたい。

ナウル島の日本語については、岡村(2000)に詳しく紹介されている。ナウル島における日本語の文化的・社会的な機能は、他のミクロネシア諸国にくらべると小さく、日常生活の中であまり耳にする機会はない。70才以上の年齢になると、決して日常生活で使用する機会も多くはないとは言え、戦後55年を経過した今でもよく日本語を記憶している。2000年に実施した聞き取り調査によって、基本的な語彙や表現が収集できた。調査対象は男性3名、女性3名で、平均年齢は73才。例えば、

[語彙]

(1) 数字、曜日、五十音など

イチ、ニ、サン・・・

ゲツヨウ、カヨウ、スイヨウ・・・

ア、イ、ウ・・・

(2) 食べ物

ゴハン、コメ、サケ、カボチャ、タクワンなど

(3) 教育に関するもの

センセイ、セイト、ベンキョウ、ガッコウなど

(4) 日常生活に関するもの

ドロボー、オドリ、ウタ、センタク、サラアライ、ソージ、シゴトなど

(5) 戦争に関するもの

ヘイタイ、タイチョウ、ホンブ、カイグン、グンカン、ヒコーキなど

(6) 親族関係語彙

オトサン、オカサン、オンナ、ムスメ、コドモ、オバサンなど

[表現]

ハラ イタイ、アタマ イタイ、バカヤロウ、コラ、オハヨウゴザイマス、サヨナラ、コンニチハ、アリガトウ、イケ、カエレ、キョーツケ、ヤスメ、チョットマツテクダサイ、ウマイナー、カライナー、バクダントーカ、ダイニッポンテイコク、ダイヘンタイ、ポウクウゴウ、ジヨウクウ、ワカルカ、ウツクシー、ビジン、ワタシノコイピト、アノネ、ワカリマセンなど

このような日本語の語彙や表現が現在でも島民の口から出てくるのは、1942年8月から終戦までの間に日本人と接触をしているからである。特に、1942年に日本軍によって開設された学校での日本語教育が大きい。大東亜共栄圏の一員として行動するために教育を受けた結果なのである。また日本軍は、1943年に島の食糧事情を緩和するために、島民をトラック諸島に移住させたことも、日本語の獲得に寄与したと言える。トラック諸島ではすでに約1万人の日本語を話せる島民がいたので、彼らとの接触によって吸収した部分が大きい。トラック島民とナウル

人との間の関係は、決して良好な関係ではなかったとの報告もあるが、筆者の調査によるとトラック諸島に移住経験のあるナウル人とそのような経験のないナウル人とでは前者の方が、より日本語の語彙力が高かった。

社会言語学的に興味深いのは、男子と女子とでは獲得した語彙の種類が異なる点である。男子は滑走路の建設といった労働をさせられたこと、軍事教練を受けたことなどが理由となって、その領域における語彙の獲得が女子の場合よりも高いことがわかった。例えばピョウキというのは、過酷な労働から逃れるために必死になって覚えた語彙であり、タイチョウというのは島民を統率するためのリーダーとして選ばれた結果獲得したのであった。女子は日本兵のために、ソーヂやセンタクをしており男子よりも、それらの語彙の獲得率が高い。

表6 ナウル島の日本語 性差

領域 / 性別	男	女
料理、掃除、看護 ¹	29.5%	39.6%
労働、軍隊 ²	48.1%	36.1%

1. メシ、ゴハン、カボチャ、コメ、ニク、ヤサイ、サケ、ミズ、カンゴ、センタク、サラアライ、タクワン、サイダー、リョウリ、ピョウイン、ソーヂ
2. カッソーロ、グンカン、ツヤク、タイチョウ、ピョウキ、カイグン、シゴト、フネ、トラック、ドーロ、ヒコーキ、クルマ、ジテンシャ、バイク、ドロボー

その他、精力的に戦時中の島嶼世界の日本語を研究している者として、京都外国語大学の由井紀久子氏、杏林大学の多仁安代氏らがいる。

おわりに

学生や一般人にわかりやすい教材の一例として、試験的に概略を記した。太平洋諸島の多様な言語的世界を社会言語学的な視座から観察した。これを土台にして、各人の関心に応じた授業が教師によってなされれば幸いである。また一人でも多くの学習者が増え、授業を通じてより質の高い教材が作成されることが望ましい。今後の課題としては、より発展的な研究および教育環境を作り、言語資料の蓄積を継続していくことが重要であると考え。

参考文献

和文

- 岡村 徹「ノーフォーク語の行方」『英語教育』大修館書店、Vol.43 No.6 pp.48-50 1994年。
- 岡村 徹「オセアニア英語小史」『言語文化学会論集』言語文化学会 pp.113-130 1996年。
- 岡村 徹「オセアニアの言語混合 ナウルの場合」『ミクロネシア』1号、通巻106号 社団法人日本ミクロネシア協会、pp.30-38 1998年。
- 岡村 徹「ナウルピジンの保護」『アジア英語研究』第2号、日本「アジア英語」学会 pp.81-97 2000年。
- 岡村 徹「日本軍占領下におけるナウル島の日本語教育」『オーストラリア研究紀要』第26号、追手門学院大学オーストラリア研究所 pp.59-82 2000年。
- 紙村 徹「パプア諸語のなかのエンガ語」月刊『言語』Vol.18 No.5 pp.24-29 大修館書店 1989年。
- 紙村 徹「エンガの世界と言葉の共有」月刊『言語』Vol.18 No.6 pp.106-111 大修館書店 1989年。
- 紙村 徹「動詞体系と文のパターン」月刊『言語』Vol.18 No.8 pp.102-108 大修館書店 1989年。
- 紙村 徹「エンガ語」亀井孝ほか編著『言語学大辞典』第5巻、三省堂 1993年。
- コムリーほか編(片田 房訳)『世界言語文化図鑑 世界の言語の起源と伝播』東洋書林、1999年。
- 崎山 理「ミクロネシア・ペラウのピジン化日本語」『思想の科学』pp.44-53 1993年。
- 崎山 理「言語による先史研究」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社、1996年。
- 田井 竜一ほか『ソロモン諸島の生活誌』明石書店 1996年。
- 田中 春美編集主幹『現代言語学辞典』成美堂、1988年。
- 多仁 安代「日本委任統治下南洋群島ボナベ島における日本語教育について 公学校卒業生の聞き取り調査から」『太平洋学会誌』第53号、太平洋学会編集 1992年。
- 太平洋諸島百科事典編『太平洋諸島百科事典』原書房 1989年。
- 高山 純ほか『地域からの世界史 17 オセアニア』朝日新聞社 1992年。
- ブラットほか(飯島周訳)『新英語の実相』松柏社 1991年。
- 由井 紀久子「パラオ語の感覚語彙と日本語からの借用語」『無差』第6号 pp.105-120 1999年。
- 吉田 恵子「南太平洋の地域開発における日本人移民の役割とその歴史的意義」『太平洋学会誌』太平洋学会編集 pp.37-61 1995年。

英文

- Bickerton, D. (1981) *Roots of Language*. Karoma Publishers, Inc. Ann Arbor.
- Cheshire, J. (1991) *English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crowley, T. (1990) *Beach-la-Mar to Bislama*. Oxford: Oxford University Press.
- Dutton, T. (1973) *Conversational New Guinea Pidgin*. Canberra: Pacific Linguistics (D-12)
- Dutton, T.E. and C.L. Voorhoeve (1974) *Beginning Hiri Motu*. Pacific Linguistics, Series D-No.24. Canberra: Australian National University.
- Dutton, T. (1973) *Conversational New Guinea Pidgin*. Canberra: Pacific Linguistics (D-12)
- Hall, R. (1943) *Melanesian Pidgin English: Grammar, Texts, Vocabulary*. Baltimore: Linguistic Society of America.
- Harrison, S. (1984) *Variation in Present Norfolk Island Speech*. Macquarie University.
- Jordan, C. (1985) Creolisation, Nativisation or Substrate Influence: What Is Happening to Bae in Solomon Islands Pidgin. *Pacific Linguistics*, Series A-No.72, pp.67-96. Canberra: Australian National University.
- Kallgard, A. (1991) *Fut Yoli Noo Bin Laane Aklen? A Pitcairn Island Word-List* (University of Goteborg, Sweden)
- Laycock, D. (1970) *Materials in New Guinea Pidgin*. Canberra: Pacific Linguistics (D-5)
- Lynch, J. (1998) *Pacific Languages*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Moag, R.F. and Moag, L.B. (1977) English in Fiji: Some Perspectives and the Need for Language Planning. *Fiji English Teachers Journal* 13:2-26.
- Mosel, U. (1980) *Tolai and Tok Pisin*. Canberra: Pacific Linguistics (B-73)
- Mosel, U. (1984) *Tolai Syntax and Its Historical Development*. Pacific Linguistics, B-92.

- Mosel, U. (1995) Tolai in Tryon (ed.) *Trends in Linguistics Documentation 10: Comparative Austronesian Dictionary: An Introduction to Austronesian Studies Part 1: Fascicle 2*. Mouton De Gruyter.
- M hlh usler (1985) The Number of Pidgin Englishes in the Pacific. *Papers in Pidgin and Creole Linguistics* No.4 pp.25-51.
- Reinecke, J. (1969) *Language and Dialect in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Romaine, S. (1988) *Pidgin and Creole Languages*. New York: Longman.
- Ross and Moverley (1964) *The Pitcairnese Language*. London: Andre Deutsch.
- Sandfur, J. (1991) A Sketch of the structure of Kriol. In Romaine (ed.) *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schnukal, A. (1991) Torres Strait Creole. In Romaine (ed.) *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sebba, M. (1997) *Contact Languages: Pidgins and Creoles*. London: Macmillan Press LTD.24
- Siegel, J. (1990) Pidgin English in Nauru. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 5:2. pp.157-186. Amsterdam: John Benjamins B.V.
- Siegel, J. (1991) Variation in Fiji English. *English Around the World: Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Simon, L. and Young, H. (1978) *Pijin Blong Yumi: A Guide to Solomon Islands Pijin*. Solomon Islands Christian Association, Honiara.
- Tryon, D.T. (1987) *Bislama: An Introduction to the National Language of Vanuatu*. Pacific Linguistics, Series D, No.72, Canberra : Australian National University.